京都府立大学学術報告（人文）第 73 号　（2021 年 12 月）

「脳の多様性」の当事者批評
観光についての自己エスノグラフィーに依拠して

横　道　　誠

1. はじめに

1. 1. 脳の多様性と自己エスノグラフィー

人類は、まだ広く知られていない「脳の多様性」（ニューロダイバーシティ）を生きている。「脳の多様性」とは、自閉症権利運動から出てきた用語で、いわゆる発達障害（神経発達症群）をさまざまな脳のあり方の一様態として理解する考え方を指している。この観点から発達障害者も、そうでない者たち（定型発達者と呼ばれる）も「脳の多様性」を生きているという見方が生まれる。前者は少数派、後者は多数派に属する。本稿は、その「脳の多様性」の理念への貢献をめざしている。

本稿の中心には私自身の自己エスノグラフィー（autoethnography）を置いている。自己エスノグラフィーは、もとは「「仲間内」に関するエスノグラフィー」を含意していたのだが（Hayano 1979, 99）、現在では自分が置かれた状況についてのエスノグラフィーを指すことが多い。そのようなエスノグラフィーは科学あるいは学問にとってふさわしいものなのだろうか、と疑問を提示されることがある。その疑問に対する答えには、アーサー・P. ボクナーのつぎの言葉がふさわしいだろう。

> エスノグラフィーの別様の可能性を探求する者は通常、興味深く、革新的で、示唆に富んだテクストを、想像力を殺すのではなく育てようとする仕事を生みだす（Bochner 2000, 268）。

ボクナーは、児童心理学者のロバート・コールズが、人生の生きた瞬間をどのようにして心に収められるのかという問いに対して、理論ではなく、物語によってそれが可能になると答えたことに注意を促す（Bochner 2000, 271）。つまり、自己エスノグラフィーを含めた前衛的なエスノグラフィーは物語の力によって、従来のアカデミズムの枠組みを超えた、新しい学問的価値を提出しうる。

1. 2. 当事者批評へ――観光体験、および霊感源としてのゲオルク・フォルスター

この自己エスノグラフィーが「当事者批評」でもあることに、注意を促しておこう。当事者批評とは耳慣れない言葉のはずだが、「当事者研究」をもじった造語だ。当事者研究は、病気や障害の当事者が、その苦労の仕組みを仲間と協力して解明することで、苦労の扱いに長じるようになっていくという精神療法を指す。医学書院の「シリーズ　ケアをひらく」（2019 年に第 73 回毎日出版文化賞企画部門を受賞）から刊行された拙著『みんな水の中――「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』は、当事者研究に依拠した私自身の苦労の仕組みの解明だった。私はそれを詩に準じた様式、論文めいた様式、小説を思わせる様式で表現した。その特異な形式を持った自己エスノグラフィーの試みを、私は「文芸創作的／文学研究的当事者研究」と呼んだ（横道 2021c, 293）。他方、『みんな水の中』についての書評で精神科医の斎藤環は指摘した。

> 本書でもっとも興味深いのは、こうした特異な世界の記述に際して、数多の文学作品が縦横に引用される点だ。従来の当事者研究が自然科学的な記述を目指すのに対して、横道は「文学および芸術と関係づける」ことを目指す。近年注目を集めている「中動態」概念も、発達障害者にとっては日常的なモードということになる。彼らはまるで、哲学の概念を感覚的に基礎づけ、観念の受肉を試みるかのようだ。／そう、私たち定型発達者（マジョリティー）にも、文学や芸術を通じて発達障害者の世界の一部を共有し、横道のいう「脳の多様性」に思いを馳せることができる。その時過去の傑作群は、まったく異なる相貌をもって立ち現れるだろう。これが面白くないわけがない。その意味で本書は批評の書だ。／作品や作家を診断するのが「病跡学」なら、ここにあるのは病跡学を反転させた「当事者批評」という新しい可能性の端緒なのだ（斉藤 2021, 28）。

斉藤は当事者研究を踏まえて、「当事者批評」を命名している。私はこのいまなお存在しない当事者批評という新しい批評の可能性を、本稿でさらに開拓してみたい。

本稿の中心に据えられた自己エスノグラフィーは、観光という体験の記録として執筆されている。「観光についての自己エスノグラフィー」自体も、画期的な実験と言える。だが私の霊感源は古典的なものだ。これは 18 世紀に出版されたゲオルク・フォルスターの旅行記を、私なりに継承したものなのだ。

フォルスターはジェイムズ・クックによる第二次世界就航を記録した『世界周航記』で、初めて見る新世界を、しばしばヨーロッパの古典文学の枠組みで切りとろうとしている（Forster 1965; 1968）。彼は頻繁に古今の詩人や作家の作品を引用し、それによって自分の感覚を代弁させている。それらは、ポストコロニアル批評の立場からすれば、自身を「文明」と見なす立場からの「野蛮」と見なされたものへの一方的な切り取り方ということになるが――ただしフォルスター

は新世界に対する自分のまなざしが虚構的だということにも自覚的だった――、違った角度から見れば、それらは異質な価値観同士の独特な協奏として捉えなおすこともできる（横道 2020b, 117－118）。

私は、このフォルスターの流儀を活用して、障害者の世界観を立ちあげようと試みる。観光地をさまざまに訪れて、心に浮かんできた文学作品からの引用を掲げたり、芸術作品に関連づけたりする。それはしばしば京都観光に関する固定的な通念にとって異質なもので、それが「脳の多様性」をよく示すだろう。それではまずはその記録、観光についての自己エスノグラフィーを提示しよう。

2. 観光についての自己エスノグラフィー

2.1. 第 1 日

2 月下旬のある日、起床した私はいつもどおり「水中世界」のなかにいる。私がなぜ「水中世界」にいるのかついては、拙著『みんな水の中』（横道 2021b）をご覧いただきたい。簡単にまとめれば、それは自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如・多動症（ADHD）、発達性協調運動症（DCD）、そして解離（現実と幻想の融合）の結果と考えられる。

トイレに行き、歯を磨き、レトルトの米飯を温め、炒り卵を作る。レトルトの米飯と炒り卵は、1 週間の朝食のうち 5 食は食べている。DSM-5 で ASD の診断基準にも挙げられている偏食傾向の典型例だ。お好み焼きに至っては、現在 1 週間に 10 食は食べている。つまり 2 食に 1 食はお好み焼きなのだ。さすがは大阪出身者と言えるだろうか。

食べ終わったあとは、コーヒーを淹れる。嗜癖への依存傾向が強いことも、発達障害者に特徴的と言える。社会が私たち少数派のことを考えて設計されていない点に原因がある。社会がもっと少数派のことを考えて作られていたら、それはふわふわのクッションのように私たちを受けとめて、私たちは嗜癖に依存する必要がなくなるだろう。

寝転び、コーヒーを飲みながら秋草俊一郎の『「世界文学」はつくられる』を読む。今年開催される国際独文学会（IVG）の口頭発表に使うために、あちこちのページに印を付けていく。コロナ禍によって多くの国際学会がオンライン化しているので、できるだけいろんな国際学会に参加して発表しておこうと私は考えている。

しばらくすると立ちあがって、家を出る。マンションを出て東進する。残念なことに、この一帯の街並みはつまらない。かつてベルリンに住んでいたとき、その街も凡庸な街並みだと思って暮らしていたのだけれど、それでもそこには旧東ドイツの日常の名残とでも呼びうる何かが残されていた。それに比べて、日本の通常の市街地の景観には、何かの名残と呼びうるものが残されているだろうか。

最寄りのバス停「金閣寺前」で右折し、先に進んで金閣寺の敷地に入ってゆく。9 時の開門ま

であと5分ほどだ。先頭は私。コロナ状況下でなければ、こんな体験はなかなか得られないだろう。

いざ入場して観た金閣はおもちゃのように燦然としている。この建造物を初めて観たのは、2017 年。あと 1 年でこの街に住んで 20 年になるのに、観たことがないのは寂しいかもしれないと考え、訪問した。あのころは岩倉の閑散とした地域に住んでいて、この付近の観光客の多さに辟易した。

しばらくまえに読んだ内海健の『金閣を焼かなければならぬ――林養賢と三島由紀夫』が頭をよぎる。「黄金」と三島由紀夫の「右」のイメージから、大江健三郎の「セヴンティーン」も想起されてくる。

> おれは十万の《左》どもに立ちむかう二十人の皇道派青年グループの最も勇敢で最も兇暴な、最も右よりのセヴンティーンだった、おれは深夜の乱闘で暴れぬきながら、苦痛と恐怖の悲鳴と怒号、嘲罵の暗く激しい夜の暗黒のなかに、黄金の光輝をともなって現れる燦然たる天皇陛下を見る唯一人の至福のセヴンティーンだった（大江 2018, 44）。

背景の北山を見て、今度は『万葉集』に収められた持統天皇の歌を思いおこす。

> 北山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月も離れて（佐竹ほか 2013, 160）

この歌の「北山」は金閣寺周辺の北山をも、勤め先の大学がある北山駅周辺をも意味していない。奈良で詠まれた歌だ。だがむかし読んだ注釈には「飛鳥には北山と称すべき山がない上、下二句も意味不明」とあった（佐竹ほか 2013, 161）。星と月が地球――当時は球形とは考えられていなかったはずだが――から離れていくように感じられたという宇宙感覚の歌だろうか。

ASD 者は、内受容感覚に鈍感な傾向があると言われていて、私もその例に漏れない。尿意や便意が分かりにくいため、念のためトイレで用を足しておく。ところが、そこから出てきた私は、気がつくと自動販売機でロッテの飲むアイス「クーリッシュ」を購入していた。寒い季節に、シャーベットを吸う。季節の変化に囚われにくいのも ASD 者の特徴だ。

石畳の道が歩きづらいと思う。子供のときは、このような道は桂馬跳びで歩きたがったものだ。ASD のいわゆるこだわり行動。いまはその衝動を制御できているけれど、代わりに歩きながら足首をコキコキ回してしまう。子どものときにはチックが酷かったが、それがこういう形でピンポイントに残ってしまったような気がする。

バス停「金閣寺前」に戻って気がついたのは、京都市内では珍しく、ここにゴミ箱が置かれているということ。観光客の増加が、ゴミ問題をもたらしたのだろうか。私は「クーリッシュ」の容器をゴミ箱に突っこみ、イタリア語で〈arrivederci〉、つまり「さようなら」と言った。

北大路通りを西進し、千本北大路の交差点を渡って南へ進路を取る。このあたりを歩くのは初めてだ。珍しく地下道があるのに気づく。村上春樹について論文を書いたことがある私は、彼の

小説によく出てくる地下世界を連想する。その地下道に入れば、出てきたあとは、この世が「1Q84年」や「世界の終り」になっている。そんなことがあったら楽しいなと思い、笑ってしまう。人が見たら不気味と感じるだろう。

インターネットで検索すると、このあたりが「楽只地区」という、京都でも有名な同和地区のひとつだという情報が出てくる。千本北大路の交差点の北東に、人権資料を展示した京都市の施設「ツラッティ千本」があるという情報もある。毎日のように歩いている場所なのに、気づかないものだなあ、と感嘆する。その施設がまもなく少し南東に移転するらしいと知る。

大徳寺へと続く石畳の道を歩くと、ブリュッセルの街中のことを思いだされる。旅行用のトランクを押しながらごろごろと道を歩いた記憶が、頭の片隅にカサカサとうごめいている。ごろごろ、カサカサと記憶が揺れる。さらに歩くと孤峰庵があり、それを築いた小堀遠州と、遠州を称えたブルーノ・タウトの水墨画帖が頭をよぎった。いつかなかに入ってみたいものだ。

大徳寺の竹林を抜けて左折し、大徳寺の塔頭のひとつ、芳春院の見物に出かけるが、行ってみると、この時期は非公開とのこと。そのなかの昭堂は呑湖閣と呼ばれ、金閣、銀閣、西本願寺の飛雲閣と並んで京の四閣と呼ばれているらしいから、興味があった。また公開される時期に再訪するしかない。私の行動を、人は行きあたりばったりと考える。

南に歩いて三門の金毛閣を見あげる。千利休が自分の像を置いて参拝者を自分の足元をくぐらせてしまった。自分や天皇に対して無礼であると豊臣秀吉が憤って、利休の自死を招いた場所がここだ。利休の鬼気迫る遺偈と辞世の句のすばらしさ。

> 人生七十、力圍希咄、吾這寶劍、祖仏共殺
> 提ル我得具足の一太刀、今此時ぞ天に抛（井口ほか 1969, 55）

「じんせいしちじゅう、りきいきとつ、わがこのほうけん、そぶつともにころす」。「ひっさぐる、わがえぐそくの、ひとつたち、いまこのときぞ、てんになげうつ」。これ以上に迫力のある辞世の歌がほかにあるだろうか。

以前、大徳寺の少し北に住んでいたことがあって、この寺にも何度か訪れたのだが、茶の湯にゆかりのある武将の墓が多くあるのを興味深く感じた。勤め先のすぐ近くには、そのような武将のひとり、古田織部の美術館が建っていて、この大徳寺からも遠くない。またいつか訪れようと思う。利休、織部、遠州が愛用した茶器は、ときにはミニマリスティック、ときにはマニエリスティックで、彼らの前衛性に心がときめく。

バス停に向かって歩きながら、iPhone で『カンボジアン・ロックス』を聴く。1960 年代から 1970 年代のカンボジアのガレージロックやサイケデリックロックの曲を集めた名盤。京都を歩きながら、50 年前の東南アジアやポルポト政権に思いを馳せるのも乙なものだ。カンボジアのロック、エチオピアのジャズ、イランの電子音楽、アフリカの童謡といった不思議な音楽を、私は大いに愛好している。

バス停「大徳寺前」から 205 系統に乗って「下鴨神社前」まで行き、降りて下鴨神社に向かう。『カンボジアン・ロックス』を聴くのをやめて、糺の森の空気にひたる。空気が光の綾を織りなす緑色に染まっている。頭上を仰ぐと、バチカン宮殿のシスティーナ礼拝堂を思いだす。左右の樹木が中央に向かって天蓋を作っているような印象があるためだ。

糺の森を出た私は、藤村美樹が歌う「夢・恋・人。」を聴く。松本隆が作詞し、細野晴臣が作曲と編曲を担当した昭和歌謡の名曲。レトロなものを嗜好するのは、発達障害によくあること。周囲の空気を読めない（あるいは読まない）傾向があるため、自分の同時代の流行に冷淡になりやすい。未来の流行に嵌ることは原理的に不可能なため、過去の流行にすっぽり嵌る。

出町柳の河合橋から北側の高野川を眺めて、北園克衛が『白のアルバム』に収めた「薔薇の 3 時」の一節を思いだす。

水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り
水の光り水の光り水の光り水の光り水の光り（北園 2017, 58）

出町柳から東に進み、百万遍交差点に出る。少し南にある京大生協の「カフェテリア・ルネ」で食事をしたかったが、閉まっていたので仕方がない、近くのローソンでアイスクリーム「パルム」を買って食べる。こんな寒い日にアイスクリームばかり食べなくても良いのに、と自分で自分をおかしく感じながら、百万遍交差点から東の坂を登ってゆく。この道は京都大学の大学院に通っていたころ、毎日のように歩いた道だ。体がすっかり重くなったため、そのうちファスティング（断食）に取りみたいという着想が湧く。

坂を登りきったところにある白川通今出川の交差点の北東には、かつて新刊書店があった。古書も文房具も売っている古い運営形態で、一時期は毎日のように通ったため、懐かしい。失われたものを愛惜するのは定型発達者も発達障害者も変わらないが、同一性保持への固執という特性を持つ ASD 者は、その傾向がより強い。あの書店のめきゃめきゃした雰囲気に思いを馳せる。

東の銀閣寺道を進んでいく。哲学の道の北端で、小学校高学年の団体に遭遇する。遠足だ。みんな空色のジャージを来ていて、イスラエル、フランス、アメリカ合作の映画『迷子の警察音楽隊』みたいだ。子どもたちよ、砂漠地帯まで歩いていって、軽やかな音楽を演奏してくれたまえ。

哲学の道も大学院生のころは毎日のように歩いていたが、銀閣寺を参拝するのは今回が初めてのこと。入場してすぐ眼の前に銀閣があるのは予想外だった。池のまわりを歩き、桂離宮の回遊式庭園を思いだす。一日に金閣と銀閣を見たのはとても贅沢なことではないだろうか。

それにしても寒い。寒いからロジャー・C. マツオ・アラードの寒そうな俳句を思いだす。

an icicle the moon drifting through it（Matsuo Allard 2016, 80）

訳せば、「一本の氷柱があって月がそのなかを漂っている」（Kacian 2013, 80）だろうか。もっと俳句らしく訳せば、「表面を月が移ろう氷柱（つらら）かな」。

道を戻って哲学の道を南下。傍らを流れる琵琶湖疏水が、10 年以上前の記憶をくすぐる。初夏の夜にはよく、このあたりで蛍が飛ぶのを見ながら帰宅した。あのころは毎晩のようにこの道でストーカー行為を受けていた。

ふと、ヴェルナー・ヘルツォークの映画『アギーレ / 神の怒り』が頭にひらめく。終幕近く、アマゾン川をくだる筏の上で、クラウス・キンスキーがドスの効いた声で発話し、小さな猿たちが跳ねまわる。ポポル・ヴーの音楽が踊る。しかし、このあたりでよく見かけるのは、猿ではなくて猫だ。

途中の道を右折して書店の「ホホホ座」に寄る。寄るたびに、北白川通にあった前身の「ガケ書房」を思いだす。壁から車が突きでている外装が伝説的だった。ここの主人が、あれを若気の至りだったと回顧するインタビューをどこかで読んだことがあるが、多くの人の心に星屑の煌めきのように残っている情景だ。

平凡社ライブラリーの『病短編小説集』を買おうかどうかと悩んだものの買わず、店を出て鹿ヶ谷通に入り、南下。かつて下宿していた寮のごく近所にあたる。第三錦林小学校が右側の視界で流れてゆく。沢田研二はこの学校に通っていた。沢田のヒット曲「勝手にしやがれ」や、彼が主演した映画『太陽を盗んだ男』をこよなく愛する私にとって、一種の「聖地」だ。頭のなかで「ジュリー、ジュリジュリー、ジュリジュリジュリー」と呟きながら歩く。なぜ口に出さないかというと、他人に聞かれると恥ずかしいからだ。

なお南下して永観堂を過ぎる。秋の名所として有名な場所だから、「たまには普通の人っぽいことをするか」と思って、紅葉を観にきたことがあった。今回は南禅寺三門を観に行って、その前にある石段に腰をかけて、しばらく休憩する。次第に、わざわざ持ってきた上出遼平の『ハイパーハードボイルドグルメリポート』を読みたくなってくるから、取りだす。アフリカの中部および西部の伝統的な主食「フフ」についての記述。フフとは、キャッサバなどから作る餅のような食べ物らしい。

> 見るからにふるふるぷるぷるとした出来立てのフフは枕にしたら最高の寝心地を提供してくれそうで、眼が覚めるたびにちぎって食べたくなるような、そんなやつだった。〔…〕奥さんは巨大まんじゅうのようなフフを、時折手を水で冷やしながらソフトボール大にちぎり、小さな洗面器に取り分けてペシペシと叩いた。表面が平らになると、取り出して大きな洗面器の縁の上にそっと乗せる。それを繰り返して、巨大洗面器の真ん中に大フフ、その周りを

囲うように小フフが並んだ（上出 2020, 111－112）。

本を閉じて「フフフ」と笑う。「フフフフ、フフ」。

南禅寺参道を進み、「歴史的風土特別保存地区」の立て札を眼にする。京都でこの立て札が立っている場所は、抜群の環境を維持している。私はほとんど夢を見ない――正確に言えば、見た夢を起床後まで記憶できないということ――のだが、このあたりは何度も夢に出てきた。ほかによく出てくる土地は、東京にある中野ブロードウェイで、夢のなかで私はそこをいつもヴァルター・ベンヤミンの『パサージュ論』を思いだしながら歩いている。

琵琶湖疏水記念館の前の池をまぶしく見つめる。からだが透明にほぐれていくような気がする。さらに進んで東大路通に出て、バス停「東山仁王門」から市バス 206 系統に乗って帰宅。バスのなかでは A-Musik の「エクイロジュ」を聴く。チリの革命運動で歌われた「不屈の民」を大正琴で劇的に演奏している。この曲は大学院生の一時期、憑かれたようによく聴いたのが懐かしい。YOASOBI が少し前に発表した曲「怪物」も聞く。この曲も異様に中毒性が高い曲だ。

帰宅した私は寝転んで、体全体を使った貧乏ゆすりを何時間も続けた。ASD のこだわり行動だが、ストレスを除去し、「地獄行きのタイムマシン」を抑止する効果がある。『「世界文学」はつくられる」の続きを読みながら、私はいつまでも全身の震えに身を預けた。

2. 2. 第 2 日

３月上旬から中旬のあいだに、予定がなく晴れた日が訪れたため、京都観光の第 2 回を実施した。

眠っているときは「水中世界」に没入している気もするし、「水中世界」から解放されている気もする。確実に言えるのは、目覚めた時点で「水中世界」に沈んでいるということだ。もっとも、これは私でなくても多くの人がそうかもしれない。私の特徴は、覚醒しても「水中世界」にいるということだろう。

布団のなかで覚醒度を高めながら、劉慈欣『三体』で描かれた「再水化」のことを考える。この作品では、人間は脱水されて巻物のように丸めたり、水に浸して復元したりすることができる。

> ヒトの布きれは、それぞれすぐに水を吸って膨張し、厚みを備えたみずみずしい肉体へとじょじょに変化していった。これらの肉体はすぐに生命の息吹をとりもどし、それぞれ先を争うようにして、腰ほどの深さの湖から二本の足で立ち上がる。彼らは夢からはじめて覚めた人間のような目で、この風と美しい世界を凝視している。／「再水化！」ひとりが声高に叫ぶと、すぐにまたべつの歓喜の声があがる。／「再水化！　再水化！」／彼らは湖の中から岸へと駆け上がり、素っ裸のまま乾燥倉庫へと走り、兵士たちと一緒に搬出作業に加わった。さらに多くの皮の巻物が湖の中に投げ込まれ、再水化して復活した人の群れがまた湖の中から走り出てくる。同様の光景が、

もっと遠方にある湖や池でも見られた。世界が復活したのだ（劉 2019, 120－121）。

この日の数日前に、勤め先で重苦しい状況を経験したため、私の心はうつろになっていたが、観光によって心の回復ができれば良いと期待した。

ぼんやりした頭で市バス 206 号系統に乗ると、私が「地獄行きのタイムマシン」と呼ぶフラッシュバックが押しよせてくる。10 代のころにテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』を観た際、主人公がよくフラッシュバックを起こすのを観ながら、あまりにも自分と同じだったのだが、そのような体験は誰にでもよくあることなのだと考えた。しかし私の場合は、ASD の特性や複雑性 PTSD の症状としてそれが起こっているのだということを、いまは知っている。

頭のなかではさまざまな記憶が明滅している。子どものころの宗教虐待（スピリチュアル・アビュース）、青年期のさまざまな苦難、最近数年間のさまざまな苦しかったこと。この数日は料理をするたびに包丁を首の頸動脈に突きたてようかと悩んでいる。

前回の観光を終えたあたりから旅程を再開しようと考えて、バス停「東山二条・岡崎公園口」で降りて東へ歩く。進んでいくと左に平安神宮、正面に京都市動物園、右に京都府立図書館が見える交差点に辿りついたので、そこを右折する。ヴォルフガング・ベッカーの映画『グッバイ！　レーニン』の一場面が想起されてくる。主人公アレックスが、友人のデニスから自作の映像を見せられる。スタンリー・キューブリックの『2001 年宇宙の旅』の冒頭に、スペースシャトルが国際宇宙ステーションに吸いこまれていく場面があるが、デニスはそれをパロディにしたホームムーヴィーを作って悦に入っている。ベッカーとキューブリックの両方の映画で使用されていたヨハン・シュトラウス 2 世の『美しき青きドナウ』が私の頭でも流れる。

私は授業で『グッバイ！　レーニン 』を多用してきた。以前は、なぜ私がこの作品を偏愛するのか自分でも不思議だったが、いまでは理由のひとつが ASD だと分かる。ASD があると、ASD 者同士では共感の仕組みが自動的に発生するものの、全人口の 9 割以上を占める定型発達者とのあいだには、それが生まれない。そこで私は、自分が発達障害者だと気づくまえから、他者の表情、話し方、挙動などを緻密に観察する力を磨いてきた。『グッバイ！　レーニン 』は、登場人物の表情、話し方、挙動などから、物語の裏面を理解できるというトリック映画として構成されている。この映画を解読するときには、私は自身の能力を最大に活用できるし、それを言語化することで効果的な教育を施すことができる。そういう魅力的な教材だったわけだ。

フラッシュバックを止めるために、ドゥニ･ディドロの『ダランベールの夢』について考える。18 世紀のヨーロッパではヒドラなどの刺胞動物のポリプが分裂生殖する様子が知識人の好奇心を掻きたてていた。また多くの知識人が、太陽系の別の惑星に知的生命体が実在すると考えていた。こうした知的文脈に立って、ダランベールは眠って夢を見、それを女性が報告する。

木星か土星に人間ポリプがいる！　オスたちは分解してふたたびオスたちに変成し、メスたちも同様だ。おもしろいものだ（Diderot 1965, 79）。

ポリプや分裂生殖のことを考えるのは、私が自分の体を透明なものと考える傾向に関係しているだろう。

三条通に出て右折し、直進するが、「地獄行きのタイムマシン」は止まらない。『エヴァンゲリオン』で、人類は液体状に融合し、より完全な生物として「補完」されるというユートピア的ディストピアが示される。『ダランベールの夢』では、人間が、切断すると分裂して増殖する群体ヒドラになれば理想的だという見解が語られる。いまの私には、それらの幻想がとても身近に感じられる。だが、それは人間が実際にそうなれば良いと望んでいることを意味しない。

川端三条に近づき、人口密度が一挙にあがる。三条大橋を渡る。以前、夜にこの橋の擬宝珠を撮影したことがあった。自分から放射状に宇宙まで広がる空間全体が、グニャグニャと変形しそうな気配を感じる。京都 BAL の丸善京都本店に入ろうかと考えたがやめておく。雑踏を歩きながら、ローベルト・ムージルの『特性のない男』で、主人公ウルリヒが屋敷の窓辺から群衆のデモを眺め場面を思いだす。

> 自分が小さな舞台のようなものの前方の縁に立ち、外側にはもっと大きな舞台があって、そこで事態が進んでいた。両方の舞台は、そのまんなかに自分が立っていることを放っておいて、独特な仕方で融合していた。すると、彼が背後に感じていた部屋の感じが、収束してゆきながら反転し、室内から屋外へと流れ、彼を貫通したり、彼の輪郭をやわらかく撫でたりした。「怪しい空間の反転だな」とウルリヒは考えた。人々は彼を超えて背後へと去ってゆき、彼のほうは人々を貫いて先にある無へと到着していた（Musil 1978, 632）。

自分を軸として、その前と後の空間が奇妙な仕方で結ばれるというイメージ。繁華街にいると、人々のわらわら歩いている様子から、まるで街が発酵して泡立っているようだと感じる。粟田信の奇書、『発酵人間』が頭をよぎる。

このあたりには、おもしろい区画がたくさんある。寺町通、新京極通、木屋町通、先斗町、錦市場、高瀬川、四条通、祇園。京都に住んでいる 20 年ほどのうちに、この付近は何度も探索してきた。京都はどの地域でも有名な史実が幾重にも重なった巨大なミルフィーユのような街だが、繁華街は賑やかなだけに、過去に思いを馳せると、現在との対比で特におもしろい。

四条烏丸で左に折れて祇園の一帯を抜け、突き当たりの八坂神社まで進む。ここにはフィールドワークの授業で来たことがあった。スサノオノミコトとインド神話の牛頭天王の関係は、比較文化論の題材として取りあげやすい。

南に進んで左折し、清水道を進む。息が切れて、コロナ対策の不織布マスクを鬱陶しく感じる。『２００１年宇宙の旅』の球体に包まれて宇宙空間を浮遊する赤ん坊や、エヴァンゲリオン初号機が暴走したり覚醒したりする場面が頭をよぎる。きょうはこのふたつの映像作品にとても囚われている。

清水寺に入って、本堂の舞台に行く。中学生の団体が遠足に来ていて、賑やかにしている。走りまわる生徒もいて、危なっかしい。それを見ているうちに、私は知らず知らずに、グリム童話の「めんどりが死んだ話」を思いだした。メンドリ、6匹のネズミ、藁、炭、キツネ、オオカミ、クマ、シカ、ライオン、オンドリが道中で続々と死んで、全滅に終わる。締めくくりの言葉を思いだす。

> und da war alles todt. (Grimm 1812, 360)

「そうして全員、死んでしまいました」。しかし、そんな不吉な連想が閃くこと自体が私の調子の悪さを示している。そこで思考を転回するべく吉岡実が『夏の宴』に発表した詩「円筒の内側」を思いだす。

> 「壁を通して／青空が見える家」／からぼくは旅に出る／桜並木の長い道がつきたところで／（点滅信号）を仰ぐ／其所から／「氷河が溶解し／世界の洪水がはじまる」（吉岡 1996, 532）

もうすぐで桜の季節だ。少し移動して、先ほどの舞台を横から眺める。見事な眺望。道をくだってゆき、本堂舞台下から仰ぎ見る。こうして見ると、本堂はまるで聳えたつ木製の巨人のようだ。釘を使わずにこれを組みあげたことに畏敬の念を覚える。「世界最古の木造建築物」という売り文句が脳裏に浮かぶが、それは奈良の法隆寺だろう。

バス停「清水道」から市バス207号系統で「東福寺」へ。ここに来るのは初めてのこと。東福寺の周囲は、時代劇のオープンセットを連想させる。2014年、伊勢・安土桃山文化村（現・ともいきの国　伊勢忍者キングダム）に行き、安土城模擬天守に登った。あれはいかにもキッチュながら、楽しい体験だった。

東福寺の本堂に入って、本坊庭園を見にいく。作庭家の重森美玲が、鎌倉期の質朴な枯山水と西洋近代の抽象芸術を総合して作った庭。10年以上前にニューヨークのイサム・ノグチ美術館を訪れたときのことを思いだす。和風と洋風の優雅な総合。私はヘラクレイトスによる地水火風の万物流転の自然哲学を重ねあわせる。テュロスのマクシモスが伝えたものだ。

> 火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる（日下部 2000, 325）。

東福寺では、開山堂の伝衣閣（でんねかく）に訪れてみたかった。伝衣閣は金閣、銀閣、飛雲閣、呑湖閣と合わせて「五閣」と呼ばれることがある建物。しかし近くの建物が工事中で、このときは開山堂への道も通行できなくされていた。私の行きあたりばったりの行動が、またしても明らかになる。

外に出ると、徒歩15分で伏見稲荷大社に着くという案内が眼に入る。しかし、きょうはやめ

ておくべきだろう。あそこに行ったら、延々と山道を登る羽目になる。いまの体力では、それは無謀すぎる。

バス停に向かいたかったが、私は方向音痴だから、うまく見つけられない危険性が高い。そこで標識があって分かりやすい JR 東福寺駅をめざす。その駅から京都駅まではあっという間だ。でも電車の本数が少なく、しかも遅延していて電車はなかなか来ない。私は Twitter を見て時間を潰していた。

京都駅に着くと、新幹線に誘われる。久しぶりに東京に行きたい思いが湧く。『シン・エヴァンゲリオン劇場版 :||』に出てきた山口県の宇部新川駅に行って、庵野秀明のファンとして「聖地巡礼」をするのも楽しそうだ。

駅構内を出て見あげると、京都タワーが屹立している。約 1 ヶ月後の 4 月 2 日には自閉症世界啓発デーが来て、ライトブルーに光る。この塔を見るたびに、ベルリンのアレクサンダー広場にあるテレビ塔を思いだしてしまうが、デザインはあちらのほうがはるかに良いし、ランドマークとしても成立していると思う。

市バス 9 号系統に乗って「西本願寺前」へ移動。ここも初めての場所。入り口をくぐるなり阿弥陀堂の威容に感動し、開祖の親鸞の言葉を思いだす。

> 涅槃をば滅度といふ、无爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性すなはち如來なり。この如來微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり、草木國土ことごとくみな成佛すととけり（眞宗聖教全書編纂所 1940, 630）。

圧巻の印象を与える建築物を観たときに、その歴史背景に思いを馳せ、その宗教性に意識が及ぶことは珍しくない。しかし、私にとって宗教絡みのことがらは、しばしば苦痛や嫌悪感となって迫ってくる。だから私はここでも、深入りをしないことにした。「地獄行きのタイムマシン」を発動させないようにするのだ。

ここにある飛雲閣は、金閣、銀閣とともに「三閣」と呼ばれる。来て初めて、それを見物するには予約が必要だと知る。自分を行きあたりばったりとなじるのは、もう 3 度目だ。結局のところ、「京の五閣」のうち、拝観できたのは金閣銀閣の「二閣」のみだった。そのふたつで充分すぎるとも言えるのだが。

さきほどと同じ系統の市バスに乗って北大路堀川に行く。移動中はスティーナ・ノルデンスタムのウィスパーボイスの曲を聴く。米津玄師は彼女の音楽を好きだと語ったが、それよりずっとまえから私は彼女の曲の熱心な聴き手だった。米津も ASD 者だと告白しているが、やはり嗜好が似た方向に向かいやすいのだろう。

北大路通りを東へ歩いて、途中から南下して銭湯の「船岡温泉」に行く。京都の有名な銭湯だ。外装と着脱場の内装がレトロだと大いに評判を呼んできたが、浴室自体はごく普通の銭湯。銭湯

はいま 450 円になっている。私は湯と冷たい水に何度も交互につかって、自分がシダ植物になるのを感じた。

銭湯から出てくると、外は暗くなりはじめていた。しばらく歩いていると家につく。途中に立つローソンの前を通るときに、最果タヒの詩集『恋人たちはせーので光る』のなかの詩、「0 時の水」が頭に閃く。

> 本当は、わたしも海を泳いでいるし、／光の筋をひろいながら、夜の音を聞くことができる、／そう思いながら深夜のコンビニから、外の景色を見つめていると、光が、生き物のよう（最果 2019, 88－89）。

帰宅して、数日前から四半世紀ぶりに見直している『新世紀エヴァンゲリオン』（テレビシリーズ全 26 話）の続きを 1 話だけ見た。数日後、これを見終わったら『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 Air/ まごころを、君に』を、さらに『エヴァンゲリヲン新劇場版』の「序」、「破」、「Q」を順に観ていき、『シン・エヴァンゲリオン劇場版 :||』を再鑑賞する予定だ。

2. 3. 第 3 日

3 月下旬になった。あいかわらず毎夕料理をするたびに、自分の喉を包丁で突きさしたくなる衝動を覚える。在原業平が『伊勢物語』の末尾で歌う辞世の歌を思いだす。

> つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを（清水 1972, 234）

「最後に歩む道とは知っていたが、昨日今日の話とは思わなかった」。心に迫る歌だ。

朝風呂に浸かって心をほぐそうとする。湯に入って、体が温まったら冷水のシャワーを浴びる。これを何度か繰りかえす。そうして自分を植物の状態へと還元してゆく。

浴槽から出た私は布団にまた寝転び、イヤフォンをして、加茂晴美の「Super Love Lotion」を爆音で聴く。処理しきれない音を受容することによって感覚を飽和させ、「地獄行きのタイムマシン」を食いとめることができるからだ。以前、川端丸太町にある「CLUB METRO」で小西康陽が DJ をやって、この曲を流したときにはとても興奮した。やはり一流の DJ は「まさか」というバランスで曲を繋いでゆく。

石原吉郎の詩集をめくって、心を落ちつかせる。

> 私がさびしいのは／私がさびしいのではない／私が海でないから／私が皿でないから／私が銃床でないから／私が詩でないから／つまり私が私でないから／ある日とつぜんに／私はさびしいのだ（石原 1994, 104）

石原吉郎の「さびしい」気持ちに、私の苦痛が吸いだされていく。

家を出て市バス205系統に乗り、南に向かう。ドラジビュスの《Barbapoux》を聴くことにする。フランス語のパンクな童謡が、私の心を泡風呂のように洗ってくれる。「北野白梅町」や「西ノ京円町」のバス停を掠めて走る。このあたりはバスでも徒歩でもよく通るけど、ほとんど知らないから、いつか探検してみても良さそうだ。

きょうは北野天満宮で天神市が開かれている。小雨が降っているため、露店の数は限定的だが、それでもちゃんと見てまわろうとすると、多すぎるほど多い。やはり眼が行きがちなのは安物の骨董や古道具、つまりガラクタの店。徳南晴一郎の『怪談人間時計』で描かれる奇妙なガジェットだらけの時計店や、藤子不二雄Ⓐの短編マンガに登場する珍奇なコレクションが、私のガラクタ趣味の原体験になった。そういうものを夢中になって集めていたのは、ほんの数年前なのに、そのころ付き合いのあった関係者とすっかり疎遠になってしまったから、なんだか遠い昔のことのように感じる。

私にはいろんなものから、すぐに宇宙に思いを馳せる癖がある。たとえば、いまいる北野天満宮はガラクタの宇宙だという思いが湧く。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』で、太陽系と不思議な関係で結ばれた女性について語っている。

> 別のさまざまな報告から、彼女はとうに火星の軌道を超えて、木星の軌道に近づいていたと結論できた。どうやら彼女はしばらく木星を、どのくらい離れてかを言うのは困難だが、とてつもない威厳で佇むのをびっくりして眺め、いくつもの月が木星を回っているのを見たのだった。しかも木星を欠けゆく月のように見て、まことに異様なことに、それは満ちゆく月が地球人に見えるような具合だった。この観察から、彼女は木星を側面から見ていることが、またその軌道を超えて、土星に向かって無限の空間を進みつつあることが結論できた（Goethe 1981, 450－451）。

この女性、マカーリエのような人物は、古典文学の登場人物だからこそ許されるわけで、実在するといま主張すれば、それはグロテスクなオカルトでしかない。

ふと見かけた撫牛には、「抗ウイルス・抗菌加工」の説明書きが添えられている。撫牛を見るたびに、半牛半人の怪物「くだん」に取材した白川まり奈の怪奇マンガ『母さんお化けを生まないで』を思いだすのだが、それは撫牛の顔つきが人間めいて見えることが多いからだ。そんなことを考えつつ顔を上げると、桜餡とカスタードの今川焼が売られていて、朝ごはんの量が少なかったので、買って食べる。

徒歩で北野商店街を南下してゆくが、このあたりは昭和の商店街という印象で、レトロ趣味をこよなくくすぐってくれる。一本の電柱で立ちどまって、眼を瞑って岡村孝子の「夢をあきらめないで」を聴く。我孫子武丸の『殺戮にいたる病』では、この曲が効果的に使用されていた。い

つかまた再読してみよう。

聞き終わったら先に進んで、京都市中央図書館に到着する。入ってすぐにある児童図書室で、安房直子と南塚直子の『うさぎのくれたバレエシューズ』の特大サイズ版という桜の季節にふさわしい絵本を見つけた。開くと、美しい桜の絵が、絵本からあふれだしてくる。

> 「こんなにたくさんのバレエシューズ、だれがはくの？」／おんなのこは、目をまるくしました。／「うさぎバレエだんのうさぎたちがはくのさ」／うさぎのくつやが　そうこたえたとき、みせのまえには、もうバレエだんのうさぎたちがあつまって、くちぐちにたずねるのでした。／「くつやさん、バレエシューズは、できたかしら」（安房 2004, 14）

桜色の配色がとても美しい絵本だ。先ほどは桜餅を食べたから、すでに桜尽くしの日。ふと石井克人の『茶の味』を思いだす。あれも桜の映像が美しい映画だった。あのシュールレアリスティックな、笑えそうな笑えなさそうなギャグセンスは私にとても合っている。

図書館がある丸太町七本松から東に向かい、千本丸太町の交差点で大極殿跡の石碑を見つめる。いまでは京都市内の中途半端な（？）場所という印象だが、かつてはこの場所が平安京の中心だったということ。古代の平安京を想像してみるが、あまり分からない。高畑勲の『かぐや姫の物語』がイメージされてくる。

まず二条駅の方面へと南進し、途中から左へ方角を変えてから二条城へと向かう。私らしいことに、簡単な道筋なのに迷ってしまう。頭のなかで立体をうまく想像することができないから、このように方向音痴なのだ。行きすぎた道を、少し戻る。

二条城に着いて入場。すぐにこの城の最大の見所、唐門があり、名前のとおり中国風だ。桂離宮を讃え、日光東照宮を貶めたタウトは、この唐門のことも大いに嫌ったことだろうが、彼が京都で二条城を訪れたかどうか、私は知らない。門をくぐってすぐ眼の前に立っている、和風の端正な建物、二ノ丸御殿が印象的だった。

先へ歩いて庭を周り、どんどん進んで本丸櫓門を抜ける。だが、その先の本丸御殿は改修中で、全体が建築工事用シートで覆われていた。二条城で私が思いだすのは、織田信長の嫡男、信忠が本能寺の変に際して立てこもり、自害して果てたという悲劇だ。だが調べてみると、その二条城はもっと東、押小路烏丸にあった別の建物で、現在のものはのちに再建されたということらしい。工事用シートを眺めながら、ランボーが『地獄の季節』の「地獄の夜」で歌った詩を思いだす。

> ぼくはあらゆる神秘を暴いてやりたい。宗教の、あるいは自然の神秘、死、誕生、未来、過去、宇宙の創生、虚無。変貌する幻影も自由自在だ（Rimbaud 1999, 186）。

私は自分が暴れまわってシートを剥がし、そのなかを「暴いて」やる姿を想像した。大変な騒ぎになるだろう。

おとなしく順路に従って出口に向かうと、軽食の露店がいくつも出ている。出口で、信忠が自刃した二条城があった一帯まで覗いてこようかと少し思案したが、きょうはやめておく。予定にしたがって二条城駅から京都駅に向かう。電車のなかでは、映画『花束みたいな恋をした』で使われていたきのこ帝国の「クロノスタシス」と、テレビゲーム『十三機兵防衛圏』の挿入歌「渚のバカンス」を聴く。

京都駅前のバスターミナルから市バス206系統に乗って、三十三間堂に向かう。欧陽菲菲の「雨の御堂筋」を聴く。大阪のことは京都よりも詳しいが、この曲に出てくる「梅田新道」という場所に心当たりがなく、インターネットを検索して調べる。いまではなくなった通りらしい。

「博物館三十三間堂」から入り口を探す。すぐ眼の前にあるのに迷い、あちこち歩き回って、また戻ってくるという迷子ぶりをまた発揮する。運動不足だから、かえって良かったと思うことにする。

初参観の2014年以来で、ここに来た。本堂の内部は写真撮影が禁止されているから、まことに貴重なものを見ることができたという思いが心に刻まれる。本堂そのものが国宝。さらに、内部に安置されている木造千手観音坐像（附・木造天蓋）、木造風神・雷神像、木造二十八部衆立像、1001体の木造千手観音立像のいずれもが国宝。全体がぼうっとしたやわらかな金色に包まれている。

それらの仏像を眺めていると、心はふたたび宇宙へ誘われる。1000の手を持つ仏が1000体以上とは、無量無辺の宇宙の表現そのもの。精神を病んだ安部慎一が、鈴木翁二の『麦畑野原』に寄稿した奇怪なエッセイ「自分の心を信じるということ」を思いだす。

> 今夜、父の家に呼ばれて、夜まで話して、帰宅する折り、送りに出て来た父と母 に対しておじぎをしたのですが、おじぎの仕方にはっきりしたところがなくて、反省しました。 ／別れる時、日常生活の一瞬一瞬について、ぼんやりとした、落とし穴とも云うような空白な部分を持ちたくないと心がけているのですが。それが心を信じることだとわかっているのですが、今夜のように、ほんの一瞬の油断が生まれます。あわてずに、ゆっくり、頭をさげて、おやすみを云えば良かったのです。又、父母の前で 煙草を一本吸って、後悔しました。日常では、時たましか吸わないのに。無意識で、生きる時が、一番嫌な時です。／私達は、太陽系霊団の一員としての使命を持って、他の天体からこの地球に来たのだと、私は、思いめぐらすことが出来ます。 ／そう、人から聞いた時に、迷っている自分と、迷わない自分が区別できるような気がしました。社会人としての働きは、地球人としての働きです。漫画家も、使命を忘れたら駄目でしょう。又、迷う自分の画いた物については、責任を問われるでしょう。 ／宇宙の意識は、建設的で、明るく、豊かです。それに反すれば、生きている根本をくつがえすことでしょう。悟るまで、地上界に残らねばなりません。私は焦りません。／しかし、うかつなことをした時は苦しみます。当然のことです。 ／「安部さんは間に合わないかも知れない」／或る人にそう云われました。私は苦しみました。いま、そう云って

> くらた人も良い人だったと思います。間に合わないかもしれない、と、思っています。あまりにも、曇った想念で生きて来ました。心というものが、わからなかったのです。いまも、はっきりわかりません。しかし、自分の中の善なる心を、信頼して、生きてゆこうと思います（安部 1978, 262 － 263）。

20 世紀後半の文章で「太陽系霊団」なんて書かれると、かなり危ない印象が生まれる。

本堂から出てきた私は、前回の観光と同様、ここから伏見稲荷神社に行くのは簡単だと考える。でも京都に住んでいるのだから旅程を詰めこむ必要はない。西に歩いて、鴨川を観、それから京都駅へと歩く。駅前のバスターミナルから、市バス 205 系統で帰宅する。ジョナサン・リッチマンや、ロス・ヨークスを聴きながら、北米と南米の音に心をそよがせる。

帰宅した私は、あがた森魚の大作、3 枚組 LP の『永遠の遠国』を聴く。カート・ヴォネガットの『スローターハウス５』の原書をめくって読む。そこにはアルコホーリクス・アノニマスでも使用される「静穏の祈り」（別名「ニーバーの祈り」）が掲載されている。

> 神よ、変えられないものを静穏に受けいれる恩恵を、変えるべきものを変える勇気を、そしてその両者を見分ける知恵を、与えてください（Vonnegut 1991, 60）。

きょうは寺院で金ピカの仏像も見たし、神や超自然現象についてもチラチラと考えたしで、トラウマが疼く日だった。心が弱っているから、全体に渡って思考がおかしい気がする。

眠る前に、細江英公が三島由紀夫を撮影した写真集『薔薇刑』のことを思った。古書価が高騰しているが、あれを購入しないままでいるのはずっと心残りだ。

2. 4. 第 4 日

4 月上旬になった。朝、このところ読んでいた武田綾乃の『愛されなくても別に』を読みおわる。朝からお好み焼きだ。『みんな水の中』を書いていたころは 5 ヶ月ほど毎日 1 食は、イズミヤで買った明太子フランスパン（100 円）を食べていたが、最近はお好み焼きばかり。作るのが簡単すぎて、病みつきになる。

市バスの系統 1 号でバス停「出町柳駅前」に行く。その近くの河合橋から高野川を北に見る眺めがとても好きだ。まえは 2 月に見たが、そのころとは河岸の様相がすっかり変わっている。枯れて一面クリーム色だったのが、生命力に溢れた緑を成している。宮澤賢治の『春と修羅』に収められた「小岩井農場」のようだ。

> 冬にきたときとはまるでべつだ／みんなすつかり変つてゐる／変つたとはいへそれは雪が往き／雲が展けてつちが呼吸し／幹や芽のなかに燐光や樹液がながれ／あをじろい春になつた

だけだ／それよりもこんなせはしい心象の明滅をつらね／すみやかなすみやかな万法流転のなかに／小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が／いかにも確かに継起するといふことが／どんなに新鮮な奇蹟だらう（宮澤 1995, 62－63）。

京阪電車の急行に乗って、出町柳駅から伏見稲荷駅まで移動する。眼を閉じて心のなかであやとりをして遊ぶ。『ドラえもん』でのび太に共感できる点のひとつは、彼があやとりの名人だという設定。とても彼らしい地味な趣味だ。ところが作品の途中から、彼は射撃の名手でもあるということになって、特に映画ではその長所が活用されるようになった。私は落胆した。勉強も運動もできず、周りからバカにされる少年が、実は銃の名手だなんて、「夢」を詰めすぎていて、あまりにも白々しい設定だ。

到着して歩く。前に稲荷大社に来たのは 2013 年だった。そのときとはまったく異なり、閑散としている。千本鳥居はやはり印象的。外国人が好むのもよく分かる。延々と並ぶ鳥居をくぐっていくうちに、神道と仏教とでチグハグかもしれないが、『正法眼蔵』の「有時」を思いだす。

われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭頭物物を時時なりと覿見すべし。物物の相礙せざるは、時時の相礙せざるがごとし。このゆゑに、同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくのごとし。われを排列して、われこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし（道元 2004, 253）。

ASD に特有の配列への嗜好が私にもはっきりとある。この千本鳥居を考えた人も、もしかすると ASD 者だったのかもしれない。進むうちにテレビゲーム『ドラゴンクエスト XI　過ぎ去りし時を求めて』を思いだす。この千本鳥居をモデルにした村が出てくるのだ。

途中に「熊鷹社」というものがある。宗教的施設を訪れて、興味が湧いても私は滅多に参拝しない。自分が受けた宗教教育のトラウマが「地獄行きのタイムマシン」として動きだす危険が高いからだ。今回も安全を期してやめておく。

数日前に、スキーマ療法のモードワークを自己流にアレンジしたものを試みた（横道 2021a）。その効果もあったのか、3 月に比べて心はかなり軽やかになっている。「四ツ辻」という場所の少し手前で、京都の市街地を見渡すことができる。桜も見えるが、すでに九分葉桜だ。視界の全体が茫洋として、水っぽい。8 年前にここにきたときも、白居易の「海漫漫」を思いだした。

海は果てしなく広大だ。眼下は底なしで、辺縁に限りはない。彼方の水平線で波と雲と重なっているところの最深部に、みっつの神山があると人は言う。その山上では不死の薬が多く生まれ、服用すれば羽が生えてきて、天仙になる。秦の始皇帝や前漢の武帝はそういう言い伝えを信じて、方士たちは毎年のように薬を採って、その地を去った。蓬莱は、いまもむかしもその名を耳にするばかりだ。水煙で茫洋として何もはっきりしない。海は果てしなく広大

で、風はどこまでも吹きわたっている。どれだけ眼を凝らしてみても、蓬莱島は見えてこない（白居易 1988, 149）。

四ツ辻まで来て地図が載った看板を見るが、先はまだまだ長そうだ。昇り階段を見ると、杖を突きながら登っている老人もいるが、私にはそこまでの意欲がない。そこでここで折りかえすことにする。

石の階段を、私は危なっかしく降りていく。鈴木いづみの『ハートに火をつけて！　だれが消す』が頭をよぎる。よろめきながら爆走するような彼女の人生。何度か転びそうになる私の天性。その失望の深さはまるで学徒動員された兵隊たちの出征。かわいそうな私の発達性協調運動症の特性。なぜかラップ風に書きたくなる習性。

できれば京阪電車に乗りたかったけれど、方向音痴なのでJR稲荷駅に出てしまう。さらにどこに行こうか、と思案する。京都でまだ観光に足る場所はいくらでもある。嵐山、京都御所、叡山電車に乗って貴船川や八瀬川の渓流に遊びに行くのも良さそうだ。恵文社一乗寺店や誠光社などの個性的な書店で新刊書を物色するのも楽しい。

しかし私は家に帰宅することにする。帰りながら、中村祐子の『マザリング』を読む。この本を読むと、「人間」、「自我」、「実存」、「人権」などに関する伝統的な議論の多くが、ヨーロッパの白人男性を規範とした一面的なものだということが感じられてきて、独特の爽快感がある。

私の身体には今月も変わらず月経が来る。その前一週間くらいはPMSにより、心身がなにか波のようなものに乗っとられているような心地になる。ふだんは平気なことでもことさら神経に響き過敏な状態になる。周期的におそってくる身体の声を聴いていなければならない時間。／月経とは、新しい生命を宿すベッドが、使用されず未遂に終わったので、毎月廃棄される、という「現象」である。その抜きさしならない現象を抱える私には、深い裂け目が開いており、そこからすーすーと大事なものまで流れて行ってしまう気持ちがした。身体のリズムに受動的にひれ伏さなければならない時期が、月に一度という頻回に起こるのが女性の身体であるという、落胆をもよおすような事実。それは、身体を社会活動を行うものとして考えれば、端的に弱みで、そうした「弱い身体」から眺めると、世界の像は一度崩れ、靄がかかって見える。そのとき、私は痛みから世界を見ている自分に気づく。抗いがたい失調を受け入れざるを得ない時間のつみ重なりの果てに、痛みに過敏である女性の感受性というものが立ち上がってくるのかもしれない。／月に一回、血が流れる穴は、子どもが宿ると、こんどは産道となるふしぎな穴でもある。そういう穴が自分の中心にうつろに空いていることが、自分に他者への感覚をもたらす通行路になるのだろうかと思える。身体の中心に、ぽっかりと空いた場所があり、何かを待っている。それは、つねに他者への可能態として身体が開かれていることへの震えのようなものかもしれない（中村 2020, 72－73）。

わたしはもうすぐ発売される『みんな水の中』とこの本はどこかが似ていると感じる。
家に戻った私は夕食を食べ、SNS を確認して、こまかな用事を済ませて眠る。長田弘の「詩って何だと思う？」を思いながら眼を閉じる。

アラーム alarm という英語は
イタリア語の all'arme
（武器をとれ）からきたと
辞書にあるけれども、
夜明けに目を覚ますのに、
毎日、必要なものは、
アラーム（武器をとれ）ではない。
目を覚ますのに
必要なものは、詩だ。
顔を洗い、歯を磨くのに
必要なのも、詩だ。
窓を開け、空の色を知るにも
必要なのは、詩だ。
一日をはじめるのに必要なのは、
朝のコーヒーの匂いと、詩だ。
思うに、歳をとるにつれ
人に必要となるものはふたつ、
歩くこと、そして詩だ。
角をまがる。小さな橋を渡る。
きれいなドウダンツツジの
生け垣のつづく小道を抜けると、
エニシダの茂みが現れる。
光と水と風と、影のように
彼方へと飛び去ってゆく鳥たちと。
人生にゴールなんてないのだ。
「まわりまわってたどりついても
見ればまたぞろこの市（まち）だ。
ほかの場所にゆく夢は捨てろ」
百年前のギリシアの詩人の忠告を思いだす。
必要なのは、だから、詩だ。
詩って、きみは、何だと思う？

括弧内は、カヴァフィス「市（まち）」（中井久夫訳）による

（長田 2015, 22 － 25）

3. 考察

3. 1. 観光のまなざしとパフォーマンス

以上のエスノグラフィーのもとになったフィールドワークは、2021 年 5 月（実際には 4 月下旬）に刊行された拙著『みんな水の中』を脱稿した直後の 2 月下旬から 4 月上旬にかけておこない、そのつど執筆した。

『みんな水の中』は、私自身に対する自己エスノグラフィーとその考察（横道 2020a）を発展させて生まれた。本稿はすでに述べたとおり、その実験的著作の延長線上に、さらに「観光に関する自己エスノグラフィー」を作成するという新規の実験の上に成立している。

ジョン・アーリは「観光者のまなざし」が、観光者の個人的記憶の枠組みを作っている文化的規範や流布しているイメージやテクストによって決定されていること、また観光体験とは観光地で観光者ともてなす側が起こす一回的で全体的なパフォーマンスだということを指摘している（アーリ / ラースン 1－4, 293－302）。だが発達障害者の観光では、その平均的な観光体験が、かなり崩される。なぜか。

観光地は一方的にまなざされているように見えて、戦略的に「まなざさせている」場所でもある。ほとんどの観光者は、観光地に一定の水準で支配されざるをえない。由緒正しい観光地にいながら、それとは「場違い」と感じられるものを想像することは、普通は遠慮すべきと考えられている。

その「まなざさせる力」は、観光地の評価が高ければ高いほど強力だ。全世界で言えば最強水準の「まなざさせる力」はおそらくフランスのパリに、国内で言えばおそらく京都にあるだろう。かつて本学の教員数名が『京都観光学のススメ』という論集を刊行したが、このような「京都観光学」といういささか無茶な造語を可能ならしめている原動力こそ、京都の「まなざさせる力」の強大さだ。

ASD 者は、「まなざさせる力」に抵抗を覚える。なぜなら私たちは「脳の多様性」を生きているからだ。ASD 者は、注意の解き放ちに優れ、人間を物の世界より特別視しない傾向があり、また定型発達者（健常者）よりも世界をありのままに捉える（村中 2020, 53－66; 75－77）。さらに加えれば、私は ADHD 者でもあるが、ADHD にも注意の解き放ちに優れる面があり、脳内ではさまざまな事象が活発に同時運動する。

「定型発達者」に対する「発達障害者」は、地球人に対する地球外知的生命体のような位置付けにある。私たちには「宇宙人の眼」がある。私たちは「空気を読めない」と非難されることもあるが、それは得体のしれない「空気」に絡めとられない自由さを持つということをも意味する。

それが、平均とは異なるという観光体験を立ちあげるのだ。

社会は多数派の生きやすさに準拠して構築されている。その結果として一部の個人の発達特性は、環境と摩擦を起こし、心の病気をもたらしてしまう。いわゆる「社会モデル」の先進的な考え方だ。私も人生を通じて、何度も鬱状態を経験し、自殺を実行するかかどうか悩んできた。私たちの特性は、現在の社会の至らなさによって「障害」になっていて、社会が成熟すれば、私たちの特性は多様性として受容されなければならない。

3. 2. 絶対的な外部が「やってくる」

私が当事者研究によって、精神的危機のひとつを乗りこえたことは、『みんな水の中』に書いた。その執筆過程で、私は自助グループと出会ったのだが、それは「外部に開かれる」体験が「やってくる」ものだったと言える。自助グループでは、さまざまな年齢、職業、生育歴の「当事者仲間」（ピア）との交流が生まれた。大学教員としての経歴を重ねてきた私にとって、それは未知の外部との接触にほかならなかった。その「やってくる」経験に依拠して、私は『みんな水の中』を執筆した。

郡司ペギオ幸夫は『やってくる』と題する著作の敢行後の宮台真司との対談で、トラウマを磨く作業によっても、絶対的な外部が自分に「やってくる」と述べる。「意味を剥奪されたトラウマ、弱いとはいえトラウマが有している忸怩たる感覚や、違和感、恐怖感につながる負の感覚が脱色されていると、なんだかよくわからないけど、何かを呼び込もうとする装置になる気がします」と彼は語る（郡司 / 宮台 2020）。自分のトラウマが、創作的手段などによって洗練されることによって、社会の側のさまざまなトラウマに吸いだされる。その吸いだされるという体験が「やってくる」のだと私は考える。『みんな水の中』は、その意味で「やってくる」ための装置になった。

『みんな水の中』を書いた脱稿したのち、私はさらに別の形で「やってくる」体験を求め、観光に眼をつけた。東浩紀は『観光客の哲学』で、観光客が観光地とトンチンカンな出会い方をすることによって、それは郵便の「誤配」に似た現象になり、「新たな理解やコミュニケーションにつながったりする」と述べる（東 2017, 158－159）。観光地という外部が、観光という媒体によって観光者との連絡を実現する。つまり外部に開かれる体験が「やってくる」。

『みんな水の中』で書いたとおり、ASD 者は「やってくる」体験を日常的に体験している。その特性によって、ASD 者は現実の混じった魔法の世界に生きているからだ。予測を超えたものがつぎつぎに現れる。さらにトラウマの痕跡のようなものがフラッシュバックとしてやってくる。そして ADHD 者は「脳内多動」と呼ばれる現象によって、やはりさまざまなものが「やってくる」のを体験する。私を例として、ASD/ADHD の当事者が観光のなかで体験する「やってくる」の連続をまとめたものが、先のエスノグラフィーということになる。

今後の課題として、『みんな水の中』でも本稿でもできなかったことを探究したい。それは当事者仲間や専門家（研究仲間）とのコラボレーションだ。『みんな水の中』を脱稿したのち、私

はオンライン雑誌『かんかん！』に「発達界隈通信！」と題する連載をおこなった。発達障害者の仲間たちに、彼ら・彼女らのライフヒストリーを聴いてまわり、記事にまとめていった。これもまた「外部」との特権的な連絡だった。「やってくる」体験が頻発した。これからは、発達障害者の仲間たちと、さらに「やってくる」仕組みについて探究していきたい。

3. 3. ウェルビーイング

1948 年の世界保健機関 (WHO) 憲章には「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます」と書かれている（日本 WHO 協会 2021）。「満たされた状態」の原文は〈well-being〉だ。ポジティブ心理学の分野では、エド・ディーナーによって「主観的ウェルビーイング」という概念が提唱され、個人の心のうちでの「幸福感」が議論されるようになった。マイテ・ガライゴルドビルは、その幸福感の決定要因について、つぎのように要約している。

> ピアソン係数によると、幸福感がより高い青年は、精神病理学的症状（精神の身体症状化、強迫観念による衝動、対人過敏、抑鬱、不安、敵意、恐怖症的不安、妄想的想念、精神病的傾向など）がより少なく、行動上の問題（学校や大学での問題、反社会的行動、内気や引きこもり、精神病理学的なもの、心身医学的なもの）がより少なく、高い社会的適応力、高い自己肯定感ないし自尊心や、多くの協調的行動、多くの適切な社会スキル、少ない否定的社会スキル（不適切な自己主張、衝動性、嫉妬による引きこもり）を示した。重回帰分析の結果、幸福感をもたらしうる変数として、高い自己肯定感、抑鬱兆候の少なさ、協調的な行動の多さ、自尊心の高さ、精神病的傾向の少なさの 5 つが特定された（Garaigordobil 2015, 1176）。

発達障害者は、発達障害者を無視して構築された社会のなかで生きざるをえないように強いられている。多数派とは脳神経の性状が異なっている——脳の多様性を生きている——ために、多数派と協調性を維持することは困難に属する。ここから発達障害者の自己肯定感あるいは自尊心は低くなり、抑鬱の兆候は高まり、精神病——二次障害として発生する——に囚われやすい。ガライゴルドビルによる先の要約は、彼女自身は意図していていないが、現行の社会で発達障害者が幸福感、つまり主観的ウェルビーイングを得ることが困難だということを説明してくれている。実際、先に提示した私の自己エスノグラフィーは幸福感あるいは主観的ウェルビーイングをめざしてもがき、しかし得られるに至っていないという記録と見ることができる。

私の観光についての自己エスノグラフィーは、私がマインドワンダリングとマンドフルネスのあいだを何度も揺れうごいいてる様子を留めている。マインドワンダリングとは心がさまざまなものに攫われ、さまよって動くことを、マインドフルネスとは心が「いま・ここ」へと定まっていることを意味する。マインドワンダリングは不幸感をもたらすことが知られている

（Killingsworth / Gilbert 2010, 932）。他方でマインドフルネス――たとえばマインドフルな瞑想によって中枢神経系（脳／心）と自律神経系（体／生理）の両方を調律する統合的心身訓練（Integrative Body-Mind Training, IBMT）――は、心理的幸福感を向上させ、感情、認知、行動に肯定的な結果をもたらすことが知られている（Tang et al. 2019, 237）。私の主観的ウェルビーイングは、幸福な世界と不幸な世界を行き来している。つまり、私は決定的な不幸にも転落していないものの、安心できる幸福にも到達していない。

私は京都府立大学の常勤教員として、ある程度は安定した収入を得ている。20 代の終わりまでは貧困に喘いでいたが、その状況は克服された。しかし幸福感は収入に比例するわけではない。より多くの所得がより多くの幸福を実現するという局面もたしかに存在しているが、所得が増加するともに一般に願望も成長するため、ライフサイクル全体のなかでは、より多くの所得をもってしてもが幸福感は獲得されなくなる（Easterlin 2001, 465–484）。

この状況で主観的ウェルビーイングを実現するにはどのようにすれば良いか。イギリスの国営医療サービス事業機関、国民保健サービスは、心のウェルビーイングを得る方法として、以下の五点を挙げている。

一、現実で他者とつながること。家族や隣人と時間をかけて交流する、しばらく会っていない友だちと食事をする。
二、体を活発に動かすこと。それによって脳に化学変化が起きる。学校や仕事の行き帰りに歩くようにするなど、無料で簡単な活動でも良い。
三、スキルを得ようと学ぶこと。料理、身近な壊れたものの修理、絵を描く、ブログを書くなど。自己肯定感があがり、他者とも繋がる。
四、他者に与えること。感謝を示す、周囲の人の気分や体調に配慮する、ボランティア活動など。
五、現在の瞬間に意識を向けること（マインドフルネス）。人生をもっと楽しみ、自分自身をもっと理解して、感じ方や挑戦の仕方を変える。
（NHS 2019 を独自に要約した）

これらの考えを利用することで、精神面での「生活の質」（QOL）を挙げていくことが、ウェルビーイングの上昇につながるだろう。

4. おわりに

障害に関する自己エスノグラフィーと観光に依拠したエスノグラフィーを融合するという実験、そしてまだ確立されていない分野、当事者批評の構築を進めるという実験を以上で終える。

発達障害者は、個人と環境の不適合によって「障害者」になる。障害者になるということは「自

由」の喪失と見なされるのが普通だろう。しかし私たちはほとんどの人（定型発達者）にない形で物事に向きあうことができるという「自由」を知っている。この「自由」が認められないならば、それは私たち「障害者」を障害の穴に落としこむことを意味する。人間の尊厳を重んじるならば、そのようなことは避けなければならない。

世の中は「障害者」のことをほとんど理解していない。たとえば、もし発達障害者が多数派だったら、社会がどうなるかという思考実験をしてみよう。発達障害者の言動こそが「正常」になり、定型発達者は「異常」と見なされる。そのような世界にならなかったのは、生物進化の偶然の結果にすぎない。もし生物進化の歴史が少し異なった世界が実現していたならば、私が今回提示したようなエスノグラフィーは「健常者」の自己エスノグラフィーということになる。

私のエスノグラフィーに対して、「京都観光にそぐわないことを感じ、考えている」と非難したくなる人もいるかもしれない。そのような「正常」な意見は、じつは「脳の多様性」を認めない「異常」な意見だ。この当事者批評は、そのような保守的で偏狭な見解に反対するために書かれた。

文献

アーリ、ジョン / ラースン、ヨーナス（2014）『観光のまなざし』増補改訂版、加太宏邦（訳）、法政大学出版局。

東浩紀（2017）『観光客の哲学（ゲンロン０）』、ゲンロン。

安部慎一（1978）「自分の心を信じるということ」、『麦畑野原――鈴木翁二作品集』、鈴木翁二（著）、而立書房、262－263 ページ。

安房直子（2004）『うさぎのくれたバレエシューズ』よみきかせ大型絵本、南塚直子（絵）、小峰書店。

井口海仙 / 久田宗也 / 中村昌生（編）（1969）『京の茶家』、墨水書房。

井口和起 / 上田純一 / 野田浩資 / 宗田好史（2005）『京都観光学のススメ』、人文書院。

石原吉郎（1994）『続・石原吉郎詩集』、思潮社。

大江健三郎（2018）『大江健三郎全小説 3』、講談社。

長田弘（2015）『最後の詩集』、みすず書房。

上出遼平（2020）『ハイパーハードボイルドグルメリポート』、朝日新聞出版。

北園克衛（2017）『北園克衛全詩集』新装版、藤富保男（編）、沖積舎。

日下部吉信（2000）『初期ギリシア自然哲学者断片集 1』、筑摩書房。

郡司ペギオ幸夫 / 宮台真司（2020）「【イベントレポート】トークイベント「ダサカッコワルイ世界へ」文字起こし④」、DAIKAINYAMA T-SITE（https://store.tsite.jp/daikanyama/blog/humanities/17529-1821421204.html）

最果タヒ（2019）『恋人たちはせーので光る』、リトルモア。

佐竹昭広 / 山田英雄 / 工藤力男 / 大谷雅夫 / 山崎福之（校注）（2013）『万葉集』第 1 巻、岩波書店。

清水好子（校注・訳）（1972）『日本古典文学全集 8――竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』、小学館。

眞宗聖教全書編纂所（1940）『真宗聖教全書』第 2 巻（宗祖部）、興教書院。

道元（2007）『正法眼蔵（1）全訳注』、谷文雄（全訳注）、講談社。

中村佑子（2020）『マザリング――現代の母なる場所』、集英社。

日本 WHO 協会（2021）「世界保健機関（WHO）憲章とは」、日本 WHO 協会。（https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/）

白居易（1988）『白居易集箋校 1』平裝、朱金城（箋校）、上海古籍出版社。

宮澤賢治（1995）『新校本宮澤賢治全集』第 2 巻（詩（1）本文篇）、筑摩書房。

村中直人（2020）『ニューロダイバーシティの教科書――多様性尊重社会へのキーワード』、金子書房。

横道誠（2020a）「当事者研究、脳の多様性、間テクスト性、芸術効果、心的外傷後成長――自己エスノグラフィーに依拠して」、『パハロス』1 号、エスノグラフィーとフィクション研究会（編）、77－147 ページ。

横道誠（2020b）「南太平洋地域の神話的空間――ルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルからゲオルク・フォルスターへ」、『神話と昔話・その他 GRMC 2020』、篠田知和基（編）、楽瑯書院、109－120 ページ。

横道誠（2021a）「『みんな水の中』以後の日常」（「発達界隈通信！」第 14 回）、『かんかん！　看護師のための web マガジン』。（http://igs-kankan.com/article/2021/05/001316/）

横道誠（2021b）『みんな水の中――「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』、医学書院。

横道誠（2021c）「文学と脳の問題」、『文學界』2021 年 7 月号、文藝春秋、292－293 ページ。

吉岡実（1996）『全詩集』、筑摩書房。

劉慈欣『三体』（2019）大森望 / 光吉さくら / ワン・チャイ（訳）、早川書房。

Bochner, Arthur P. (2000), “Criteria Against Ourselves,” *Qualitative Inquiry* 6 (2), pp. 266－272.

Diderot, Denis (1965), *Entretien entre d'Alembert et Diderot, Le rêve de d'Alembert, Suite de l'entretien*. Édition établie par Jacques Roger. Paris (Flammarion).

Easterlin, Richard A. (2001), “Income and Happiness: Towards a Unified Theory,” *The Economic Journal* 111 (473), pp. 465－484.

Forster, Georg (1965), *Reise um die Welt*. (Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe.) Bearbeitet von Gerhard Steiner. 2 Bde. Berlin (Akademie).

Forster, Georg (1968), *A Voyage Round the World*. (Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe.) Bearbeitet von Robert L. Kahn. Berlin (Akademie).

Garaigordobil, Maite (2015), “Predictor Variables of Happiness and Its Connection with Risk and Protective Factors for Health,” *Frontiers in Psychology* 6, p. 1176.

Goethe, Johann Wolfgang von (1981), *Romane und Novellen*. Textkritisch durchgesehen von Erich Trunz, kommentiert von Erich Trunz und Benno von Wiese. (Goethes Werke: Hamburger Ausgabe in 14 Bänden.) Neubearbeitete Auflage. München (C. H. Beck).

Grimm, Brüder (1812), *Kinder- und Haus-Märchen*. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Berlin (Realschulbuchhandlung).

Hayano, David M. (1979), "Auto-Ethnography: Paradigms, Problems, and Prospects," *Human Organization* 38 (1), pp. 99－104.

Kacian, Jim / Rowland, Philip / Burns, Allan (ed.) (2013), *Haiku in English: The First Hundred Years*. With an introduction by Billy Collins and a historical overview by Jim Kacian, New York / London (W.W. Norton and Company).

Killingsworth, Matthew A. / Gilbert, Daniel T. (2010), "A Wandering Mind Is an Unhappy Mind," *Science* 12 Nov 2010, 330 (6006), p. 932.

Musil, Robert (1978), *Der Mann ohne Eigenschaften. Roman*. (Gesammelte Werke. Bd. 1.) Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt).

NHS (2021), "5 Steps to Mental Wellbeing," NHS（https://www.nhs.uk/mental-health/self-help/guides-tools-and-activities/five-steps-to-mental-wellbeing/）　※年数は閲覧年。

Rimbaud, Arthur (1999), *Poésies; Une saison en enfer; Illuminations*. Préface de René Char, édition établie et annotée par Louis Forestier. Paris (Gallimard).

Tang, Yi-Yuan / Tang, Rongxiang / Gross, James J. (2019), "Promoting Psychological Well-Being Through an Evidence-Based Mindfulness Training Program," *Frontiers in Human Neuroscience* 13, p. 237.

Vonnegut, Kurt (1991), *Slaughterhouse-Five, or, The Children's Crusade: A Duty-Dance with Death*. New York (Dell).

（2021 年 9 月 28 日受理）

（よこみち　まこと　文学部欧米言語文化学科准教授）